夢窓 幼稚園通信第55号

2026年 1月 30日

雪の多い地方では、雪にとじこめられ小さな光の中で、昔語りに身の上話 ・・・・が 静かに語られ そして耳傾ける、やさしい時間が持たれてきたのでしょう。

雪国でなくても、夜ローソクを点したり やわらかな光の中で過ごす冬の時間は、誰かといっしょなら穏やかな やりとり、一人だと内なる自分との語らい・・・・の ゆたかな時間を生み出してくれることでしょう。

今 子どもたちは、自分たちのクラスのお話に 心をふくらませ遊んでいます！

そんな のどかな お話のつむぎあいから、「大きくなった発表会」のうれしい劇あそびに、ちょっぴりドキドキの鬼退治に向かっていくのでしょう。

2月の扉が 開かれます。

2・3月、年度のしめくくりの時期の序章として「鬼の話」、どうぞご一読下さい。

節分の鬼の話

頭の上で両てのひらをぴょこぴょこすると「ウサギ」になるように、両手の人指し指を立てると「オニ」と誰でもが分かりますから、相当鬼は有名人！…否…有名動物？…。うーん、有名な存在です。『今昔物語』や『宇治拾遺物語』など、説話文学にはたくさんの鬼の話が出てきます。どうも、昔むかしの古い時代には鬼やら何やら、魑魅魍魎(ちみもうりょう)が世間を徘徊していたのかもしれません。

おひさまの光輝く昼間には鬼はそうそう出てきそうにありませんが、今よりももっと夜が暗い時代なら、人々にとって未知な世界である村の向こうのむこうから、夜な夜な不吉なものがやってくると想像することは十分にうなずけます。

急に現れては人を食べてしまったり、美しい女性に成りすまし突然襲ってきたり……気味の悪い話・恐ろしい話が山盛りです。

昔話に出てくる鬼はちょっぴりこわくても、だいたい最後には退治されてしまいます。最近の話では、だいぶ物わかりのいい鬼（『大工の鬼六』はちゃんと約束を守る鬼でした）や、情の深い鬼（浜田広介『泣いた赤鬼』）もいます。徳が高く、村を襲うどころか村のために身を捧げる鬼さえいます。

そのような訳で、震えあがるような鬼は少なくなりました。それでも見た目が普通ではないので「面」をつけて登場すると、泣き出してしまう３歳の子がいますから、鬼はまだこわい存在

のひとつには変わりはないようです。

毎年、季節はめぐり、節分がやってきます。
「鬼はー　そと！　福はー　うち！」
あちらこちらから聞こえてくる声と蒔かれた豆で邪気を祓って春を迎えます。

こっそり言いますが……
自分が鬼の役をするのでそう思うのかどうか……分かりませんが、あの鬼たちはそれほどひどく悪いものではなさそうです。
そしてすこぶる嫌われている訳でもなさそうです。
これは、僕が昨年に描いたお粗末な絵ですが、豆まきの鬼の絵です。どこか憎めない感じがして豆まきのときの鬼らしく、へたくそですが眺めているうちに……我ながらずいぶん自分の絵に和まされます。
もしかするとこの鬼は人が好きなのかもしれないと思いました。

暦の上では長い冬から春へとつなぐ節分に、自ら悪を担って人々の前にわざわざ現れ、お祓いされ、退治される者として投げつけられる豆を一身にうけてくれるのですから！
鬼といっても、逆に人々の悪を背負う、まるで「キリスト存在」や「妙好人」みたいにも……
ずいぶん大げさですが……見えてきます。

よろこびの春を迎えるには、「わたしたちはどんなふうに生きているんだろう!?」と自問する自己認識の経過が必要なのでしょう。
鬼は、豆を投げられ打ち当てられる様を目に見えるように示してくれているのではないでしょうか。
ことによると、投げているのもほんとうは自分であって、打たれ追われていくのと共に、どちらも自分自身なのかもしれません。

一年の内に節分は四つあり、それぞれの翌日に、立春、立夏、立秋、立冬となりますが、不思議に立春の前の節分だけが際立っています。
暗い冬からおひさまの甦りの季節に向かう一年の始まりの春だからなのでしょうか。

きっと、新しい春の季節と共にまさしく新しい自分として一人ひとりが再び現われる節目なのですね。
そこに立ち合ってくれる鬼のありがたさよ！　です。

さあ、いよいよ幼稚園の「豆まき」の時間です。
渡り廊下に坐って、子どもたちは先生からお話を聞いています。
続いて豆が配られ始めます。小さな手の中には、煎った鬼打ち豆がぎゅっと握られていることでしょう。時折手を開いて豆を

確かめてはまたぎゅっと閉じているかもしれません。投げる前に「ひとつだけ」と、指でそっとひと粒つまみ、こっそり口に運んでいる子がいるかもしれませんね。

そろそろ登場の頃合です。
庭の外壁を金棒代わりの木の棒でバンバンとたたきながら、庭めがけて鬼三匹が現われます。「キャーッ」と声があがります。木や遊具のトンネルに身を隠しながら、じりじりと子どもたちに近づいていきます。
時は今！　子どもたちの前面に!!
「おろろろろろー♪　きょうこそは子どもらをさらっていこうぞ！」
「キャーッ」
「いじわるな子は　いないかー？」「いない　いない」
「よわむしな子は　いるだろう！」「いない　いない」
「なきむしは　だれだー？」「いない　いない」
中には泣き出している子もあるようです。
先生の合図で、「おにはー　そと」と豆まきの始まりです。
近づいては遠ざかり、豆に対抗して鬼としてのこちらも必死です。息があがってきます。
さいごに、再び先生の合図で皆で心を合わせて、とどめの決めです。「おにはー　そとー」

一斉に、てのひらの「花」が咲きます。

パッと　豆を投げる　小さなてのひらが　開くのです。

何と　生きいきとした　花々でしょう！
節分、春の到来です。

「まっ　まっ　まいったー」と、鬼が退散です。
「わーい！」「やったー！」と、背後からの子どもたちのよろこびの声で豆まきは終了です。
僕ら鬼は実にうれしいプレゼントをいただいたのでしょう。
立春を前にして、いち早く咲きほこる花々を、子どもたちのやわらかなてのひらたちの中に見せてもらったのですから。
目に見える豆よりも、あふれる生命がてのひらを通して降り注いできたみたいに感じたのです。

もう少ししたら、年長の子どもたちは一年生です。
年中、年少の子どもたちは、下の子が入園してきて、ひとつずつお兄ちゃん・お姉ちゃんになります。

2015.5
『てのはなし』より

みんな　一人ひとり、大きく開いたてのひらのように、新しい季節の中で、またひとつ大きくなるのですね。

園長　升光泰雄